

胎児性が五人 小児一人

県審 水俣病患者と断定

り、明るく希望が持てる。新しい患者の人たちもこれからは公費で治療を受けられるわけだから、じゅうぶんな治療を受けて早くよくなつてほしい。

◇大橋市立病院長の話 水俣病と診断された患者が希望すれば病室は何とかなるので、すぐに入院させる。気の毒な患者だが、治療と機能訓練によつていままでもよくなるのだから、早く治療を受けてほしい。

◇貴田委員長の話 母親が心配しながら、これまで治療を受けていない家庭がほとんどだったのだから、発見が遅れた。小児科医師としては気の毒と思う反面、何か割

女児は、生まれたときには健康な状態だったが、本人自身の食生活によつて発病したもの。症状が軽いうえに年齢が若いため福野狭サクなどの検査ができず、これまでわからなかった。姉も三十四年四月にかかっている。

五人の胎児性小児水俣病は母親の胎内で有機水銀におかされた先

水俣病調査委員会(貴田丈夫委員長)は、二十八日午後四時から水俣市湯之原「山海館」で開き、その後の調査でわかった水俣市のほか東北郡や鹿兒島県出水市の胎児小児マヒ患者八人が水俣病かどうかについて調査を行ない、うち五人を胎児性小児水俣病、一人を小児水俣病と診断した。

調査会は委員長の貴田翔大教授(小児科) 武内教授(第一病理科) 原田助教授(小児科) 大橋水俣市立病院院長、三嶋同副院長、浮池水俣市・東北郡医師会長、小川新日寧水俣十場村属病院院長の七委員が出席、疑いを持たれた八人の患者のこれまでの精査検査にもとづいて①症状②発病の時期③家族の職業④食生活—などについて調査の結果、八人のうち九歳の女児(水俣市月浦)を小児水俣病、六歳(東北郡田浦町)四歳(水俣市榑戸)四歳(東北郡津奈木町)八歳(出水市米ノ津)七歳(同)の五人の男児を胎児性小児水俣病と診断を下した。

天性患者。田浦の六歳の男児は当時両親が水俣市内に住んでいた。

この結果さる三十七年十一月水俣地区に多発した胎児小児マヒ患者十七人(うち二人死亡)が胎児性小児マヒ水俣病と診断されていたが、一年半ぶりに新患者が見つかったわけ。これで患者総数は百十一人(うち死亡三十八人)となつた。